

## 東アジア国際政治史を叙述すること

### —課題と展望—

川島真

#### 1. なぜ「東アジア国際政治史」が必要であったのか。

- (1) 国家単位の外史、あるいはアメリカなどの目線に基づく国際政治史の克服
- (2) 植民地となった地域、独立国家でなかった地域の問題
- (3) 地域内交流が活発化し、「共同体」なども議論される場としての歴史の必要性
- (4) 日本・西洋・東洋という三分法に支えられた、日本と東アジアを弁別する観点を克服する必要性（日本を東アジア国際政治史のコンテクストに落とすこと）
- (5) 数多くの個別研究の業績（特に戦後国際政治史）を通史に反映させる必要性。
- (6) 東アジアにおける歴史認識問題
- (7) 東アジア国際政治史という講義の増加、しかし既存の業績の少なさ

Cf. 『国際政治』<20世紀アジア広域史の可能性>（146号、2006年11月）

『国際問題』<連続講座 東アジア国際政治史>（479-486号、2000年）

★研究書というよりも「テキスト」として編むことに

#### 2. 作業の経緯

- (1) 名古屋大学出版会+服部龍二氏 → 川島 （2004年）
- (2) 大まかな部構成、執筆者の選定  
第一部：19世紀—1910年代〔川島〕 / 第二部 1920年代—1945年〔服部〕  
第三部：戦後〔川島・服部〕（それぞれ4章構成）

★「国際政治の中の植民地支配」（駒込武）の位置づけ

- (3) 合宿、会議など数回、執筆者の調整も。
- (4) 最終的な編集作業に1年以上。2007年初頭に入稿。  
→ 編者が相当に介入した部分も。

#### 3. 構成にあたっての考え方—どのような「物語」—にするのか

- (1) 叙述の縦軸としての主旋律がないという問題  
→ 「東アジア共同体形成史」ではないということ。
  - ・歴史の展開してきた「場」としての東アジア
  - ・日本をその東アジアに位置づける
  - ・通奏低音は何か？ → 最大の問題点  
（19世紀以来の西洋との諸関係、植民地化+主権国家化、戦争、冷戦、…）  
「競存」という基調は言えそうであるが…
- (2) 叙述の横軸としての時代相
  - ・その時々の歴史的な共通体験、時代相を描き出す
  - ・日本をその東アジアに位置づける

- (3) 物語の起点と終点をどこにおくのか。
  - ・ 19世紀からはじめる → 近世的な「東アジア世界」のアナロジー
  - ・ 終点は現在におく。対立と協調の
- (4) 台頭する中国をいかに位置づけるか
  - ・ 華夷思想、抵抗と侵略、そしてどちらに向かうのか
- (5) 植民地支配に関する章を特に設ける → 戦後の国際政治史のために
- (6) 予想されていた問題点
  - ・ 結局、日本と中国の関係が中心に据えられる可能性
  - ・ 学界の研究動向が反映されない可能性
    - コラムを活用して可能な範囲で補う
  - ・ 教科書としての体裁
    - 地図、索引（頁数の限界。最終的には人名索引のみ）、章末の課題。

#### 4. 問題点

- (1) 国家史の集合体、外交史の集合体を越えられたのか
  - ・ 書き手次第。
  - ・ 研究動向などをそのまま反映
- (2) 外交史、国際政治史、国際関係史か
  - ・ 日本外交史＋中国外交史＋国際政治史＋国際関係史＋日本史＋中国史…
- (3) 日中中心史観
- (4) 東南アジアをいかに考えるのか
  - 岩波の『東アジア近現代史』プロジェクト
- (5) 世界政治、あるいはイギリス、アメリカ、ソ連などとの関係
- (6) 物語になったのか
- (7) 編集過程における「歴史認識問題」
  - 用語の統一もできず
- (8) 史料集
  - 歴史学研究会のプロジェクト

#### 5. 教科書として使用して

- (0) 3500部は完売。いま2刷。利用されたという面では好ましいが…
- (1) 第一部第三章の重さ、第八章の位置など、いろいろな問題
- (2) 分量が多く最後までたどり着かない、学部生には難しい？
- (3) 物語性のなさ

#### 【参考文献】

- 細谷雄一「書評フォーラム 光と影の過去を受け止め、未来へ歩むための壮大な試み--東アジア国際政治史」（『外交フォーラム』234号、2008年1月）
- 毛里和子「一国史から「地域史」へ『東アジア国際政治史』」（『東方』321号、2007年11月）
- 服部龍二「東アジア国際政治史研究の可能性（小特集 近現代東アジアにおける中華民国）」（『歴史学研究』779号、2003年9月）